

高校・一般の部 優秀賞

川口 尊

父は、海軍の少尉として横須賀基地から昭和17年5月に戦艦で戦地に出発し、昭和19年8月、太平洋の真ん中にあるマーシャル諸島で戦死した。

母は6歳と2歳の男の子とで無事を祈って見送ったが、その時僕は妊娠6か月の母のお腹の中にいた。半年後、僕は無事に生まれたことを手紙にしたためたが、返事はなかった。

そして戦後、戻ってきたのはかつての部下が持ってきた、胸を射抜かれた血染めの軍服と首の骨のひとかけらだった。・・・これまでは母から聞いた話です。

以降、母は再婚、貰い子を断り、3人の子供を抱えて死に物狂いで生きて行きました。一家心中の淵まで行ったが、「愛染かつら」の歌に救われたそうです。血染めの軍服を母は形見にしていました。僕もそれを見た記憶があります。しかし、僕に着せるものがなくなり、その軍服を僕のためにリフォームしました。

今ではお墓参りのたびにこんな話を子供や孫達に話してきました。しかし、最近あまり話さなくなりました。僕自身に戦争の風化が始まったのかもしれない。自らを叱咤する気持ちでこの記事を書いている。